



藤城 眞氏

連合駿台会三月特別例会

「税負担を通じて、その本質について考える ―人口減少・資本主義・社会保障・財政・安全保障―」

元東京国税局長 藤城 眞氏

連合駿台会の今年度最後となる例会を、令和五年三月十五日（水）十七時三十分より、ロイヤルパークホテル「有明の間」で、藤城眞氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました。

皆さんこんばんは。年度末のお忙しい中、今年初めての例会にかくも大勢の方のご出席をいただき、誠にありがとうございます。コロナ禍も丸三年が過ぎ、ようやく沈静化してきたように思います。昨日は、東京でソメイヨシノの開花宣言があり、観測史上最も早い開花だそうです。これに元気をもらって、

素晴らしい一年になることを、皆さんと期待したいと思います。

さて、大学の近況ですが、大学受験志願者数は大半の大学が少子化もあり減ってきておりますが、母校明治大学は五千六百名ほど増加、約十万八千名となり、数の上では近畿大、千葉工大に次いで三位ですが、十万人の大学をキープしていることは、高校生から明治大学には大変夢があり、自分がやりたいことを応援してくれる将来性のある大学として、引き続き高い評価を得ている証だと思います。もちろんOBの皆様方のご活躍も大いに貢献しているものと思われませんが、素晴らしいことです。

その他の近況につきましては、学校側が作成した「明治大学の近況について」を資料の中に入れてありますのでご覧いただきたいと思いますが、トピックスが一つ、皆さんは、三淵嘉子さんという方をご存知ですか？一九三八（昭和十三）年に明治大学法科を卒業され、日本初の女性弁護士となり、日本初の女性判事、家庭裁判所所長などを歴任された方で、来年春のNHK連続テレビ小説「虎に翼」というタイトルで彼女をモチーフした『虎に翼』というタイトルの主人公になります。当時の女性の社会進出には大変なご苦労があったことと思いますが、ドラマでは、その激動の時代を生きた女性法曹とその仲間たちの波乱万丈



No.360 令和5年5月15日発行
発行・編集 連合駿台会
発行人 広報委員長・齋藤柳光
編集人 事務局・矢嶋まゆ子
〒101-0052千代田区神田小川町三―二二
明治大学「紫紺館」内
電話（〇三）三二九六一四七四七
印刷 有限会社 美創

の物語を描かれているようです。今から、楽しみにしていただきたいと思えます。

本日の講師は、東京税関長、東京国税局長を歴任されました、藤城眞さんにお願ひし、人口減少における、これからの社会の課題と財政、税制についてお話いただきます。アフターコロナのタイムリーなお話をお聞きできるのもと期待しております。

それから、食事中のアトラクションには、本日の目玉、まさにサプライズの方にご出演いただきます、後ほど司会の方からご紹介いたしますが、正に、サプライズ、ご期待して頂きたいと思えます。

大変短い時間ですが、大いにお楽しみいただきたいと思えます。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

*

本日は、明治大学連合駁台会にお招きいただき、ありがとうございます。

このところ、わが国では、税や財源について語られることなしに、さまざまなお話が政府や社会の責任とされて、「公助」にアウトソースされています。たとえば、この三年間のコロナ対策予算についてみると、九十四・五兆円もの金額（会計検査院調べ）が支出されていますが、その財源について考えていた方はどれほどいらっしゃるでしょうか。「支出の増額は、とどのつまりは税金の増加であ

る」と白洲次郎氏は言われました（「プリンシプルのない日本」・一九五三年）が、そうした意識が少し希薄にはなっていないでしょうか。

高齢者福祉、グリーン、DX、子育て、防衛、国土強靱化、ODA……、確かにどれも重要な施策です。しかし、財政的な予算制約を意識せずに議論をしていると、政府全体としての政策のありよう、優先順位付けを考える視点が欠落しかねません。

①人口問題の深刻さの意味

ふりかえれば、この先二十年後、四十年後に、私たちの生活や暮らしはどうなっているでしょうか。皆さんは、どこに住み、ご家族はどうされているか。仕事や経済、社会、国際関係はどうなっているでしょうか。

わが国では、人口減少、少子高齢化が世界に先駆けて進行しています。しかし、人口減少そのものよりも、高齢化率が四割に近い状態が何十年も続いていくことの方が問題です。生産年齢人口を確保するために、日本も移民の受入れに踏み切るべきでしょうか。それとも人口減少と高齢化による経済縮小スパイラルに甘んじていくのでしょうか。持続的な経済社会を維持するために何らかの選択が必要ですが、いずれの選択をしても、財政ポピュリズムや排外ポピュリズムに晒される危険性

が高いと危惧されます。

②日本の資本主義経済は何が課題なのか

私たちの生活の基盤となる日本の資本主義は、どうでしょうか。政府は「新しい資本主義」を掲げますが、その内容を見る限り、成長戦略と、社会性や弱者の包摂、地方対策や個別の産業政策から成り立っています。欧米の「新しい資本主義」は、株主利益の追求（株主資本主義）の行過ぎによる格差の拡大や経済の近視眼化に反省して、さまざまなステイクホルダーに配慮した資本主義のありかたを模索するものです。一方、日本では、過度の低価格志向や、失敗を避ける安定・安全志向、政府に対する介入期待などの結果、投資におけるリスクテイクや新規産業の創出、低生産性企業の淘汰といった、生々しい資本主義の本質が貫徹されているとは言い難いように思えます。格差以前に低所得が問題となっている日本では、アメリカと比べて資本主義が足りないかのようにも見えますが、そろそろ本気で生産性上昇につながる構造改革や成長戦略に取り組む必要があるのではないのでしょうか。

もちろん他方では、経済ばかりが人生の重要事項ではないといった視点から、成長にそれほどこだわらなければならないという声もあります。カネで測られる価値と、カネで測ること

表1 3つの福祉レジーム (エスピン・アンデルセンの見方による)

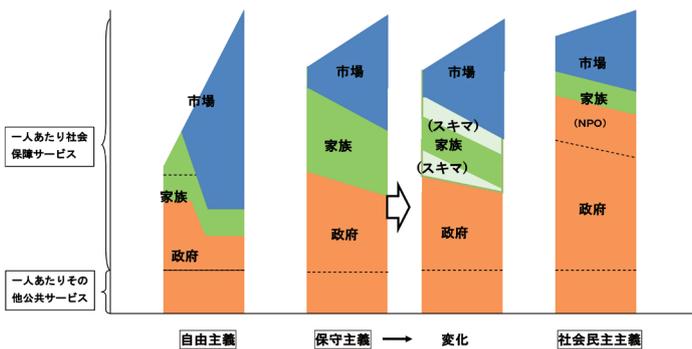
	自由主義	保守主義	社会民主主義
家族、市場、政府の役割	市場中心	家族(職能団体)中心、政府が補完	政府中心
連帯のかたち	限定的、個人的、市場的		普遍的
所得格差	大		小
財政、税負担の規模	小	中	大
雇用	共働き、緩い雇用規制、低失業 →低賃金雇用の固定化	片働き、所得維持と硬直的な労働市場、高失業 →弾力化の要請	共働き、弾力的な労働市場、再訓練 →公的サービスの高コスト構造
背景	・ 階層間の異動可能性、「機会の平等」への信頼 ・ 公正で自由な競争 ・ 自己責任、個人の自立 ・ 格差は個々人の選択の結果	・ 家族などの血縁、地縁などの共同体が、市場と政府を補完 ・ 非制度的、個人の自覚性に依存。→不確実・不安定な側面も。 ・ ウェットな人間関係。 ・ わが国で、脱家族化、カイシャ化が進行	・ 政府活動への信頼、コミット ・ 国民一般を対象に生活上のリスクを軽減。教育、社会投資の重視 ・ 桁外れの国民負担 ・ 画一的で非効率的な公的部門 →重要な政府活動のチェック
典型例	アメリカ	(日本) ドイツ、イタリア	北欧諸国

(注)エスピン・アンデルセン「ポスト工業社会の社会的基礎—市場・福祉国家・家族の政治経済学」(渡辺雅男・景子訳、桜井書店)等を参照。

③ 社会保障とわが国の「社会モデル」の方向性
社会保障については、年金、医療、介護や福祉、さらに生活支援、教育、子育て政策な

のできない価値は対等です。ただ、日本のような超高齢化社会を持続的なものとするためには、やはり成長を捨て去ることはできないと思われれます。

図1 「3つの社会モデル」のイメージ —脱家族化による保守主義の変化



(注1) 社会保障サービス等について、「市場」、「家族」、「政府」の提供主体の位置づけの違いに着目し、3つの社会モデルを提示。各種グラフにおいて、「左端」は低所得者の受益レベル、「右端」は高所得者の受益レベルを想定している。グラフの層の勾配は、低所得者と高所得者との間の受益レベルの差を示している。「保守主義(高齢化の進展ケース)」は、社会保障サービスの受益者たる高齢者の増加により、棒グラフの高さが伸びていることと表現している。
(注2) エスピン・アンデルセン「ポスト工業社会の社会的基礎—市場・福祉国家・家族の政治経済学」(渡辺雅男・景子訳、桜井書店)のイメージを採用。その解釈の責任は筆者にある。

を充実してほしいという「夢」が語られる一方で、誰も財源負担を望まないという厳しい「現実」も存在して、そのはざままで揺れ動いています。潜在的国民負担率(租税負担+社会保障負担+財政赤字/国民所得)でみると、日本は先進国の中で中規模の政府を持つ国です。しかし、将来に向けて、私たちは日本にどのような「社会モデル」を期待しているのでしょうか。
デンマークの社会学者エスピン・アンデルセンによれば、「社会モデル」は、アメリカ

などの「自由主義」、北欧などの「社民主義」、そして日本などの「保守主義」の三つのタイプに分類できます(表1及び図1参照)。「自由主義」(低負担・低福祉)は、「頑張りば上に行ける」という階層間の移動可能性を前提とし、機会の平等と自助をベースに自由競争に任せるシステムです。格差は各人の努力の結果とされ、ボランティアや寄付などが奨励される一方、政府の介入や税負担は相対的に小さいものとなります。「社民主義」(高負担・高福祉)は、社会保障が医療や年金等の保険分野に留まらず、失業、離婚、育児、学び直し等への自立支援や積極的労働政策にまで及ぶものです。生活に安心感がありますが、税負担は非常に高く(スウェーデンの消費税率二五%)、政府への信頼と透明性の確保が不可欠となります。「保守主義」(中負担・中福祉)は、いわばその中間にある古典的なモデルです。昭和期の日本に見られるように、家族や地域のコミュニティといった中間団体における助け合いが、自助と公助を補完します。ただし、それらには制度的な担保はなく、家族の構成員の絆の強弱や地域住民の自覚性次第という不確実性が拭えません。
日本では今やサザエさんのお宅に見られるような大家族は絶滅寸前です。カイシャの福利厚生も解体され、死別、離別、独身などで

頼れる家族がない単身者も増えています。他者との関係性が薄まるなかで、「家族」のスキマをどう埋めればいいのか。増税をして政府や公務員に代替を求めるのか（「社民主義」）、個々人の自助に任せるのか（「自由主義」）、再度家族や仲間・友人との関係性を見つめ直すのか（「保守主義」の再興）。ただ、現実問題として自助や共助を強化する動きは鈍く、いきおい政治や政府に対応が迫られ、国の借金でどうにかやりくりしてきたのが実態ではないでしょうか。

私は、これまで二十年近くにわたって、講演や面談の機会を利用して、さまざまな方に「どのようなモデルを望みますか？」と尋ね回ってきました。皆さんの意見は実に区々ですが、企業経営者は「自由主義」、専業主婦や学生は「社民主義」、高齢層は「保守主義」や「社民主義」、男性サラリーマンは「保守主義」が多い印象でした。あるデータでは、地域別で見ると、関東では「自由主義」、関西では「社民主義」、北陸では「保守主義」がやや多い印象です。

ただし、近年は学生の間でも「自由主義」が増えていますし、主婦の方々の中にも、親の介護の苦労などを経験して、「自分の面倒は自分でみる。」との意見も見られています。一方、「うちは家族がしっかりしている。」として、「保守主義」を推す声も根強いものが

あります。ただ、「男性」中年サラリーマンが保守主義を支持する理由の多くは、単純に政府の規模が「中くらいだから」というものです。聞くと、家族が面倒を見てくれるかどうかには自信がなく、社会のためのボランティア活動なども実践していない……（苦笑）。ちなみに二十年前のあるデータでは、日本人の支持は三分されています。どのモデルを提案しても三分の二が反対する構図です。どおりでどの政党も自らが求める社会像について、立場を明確にしにくいわけです。

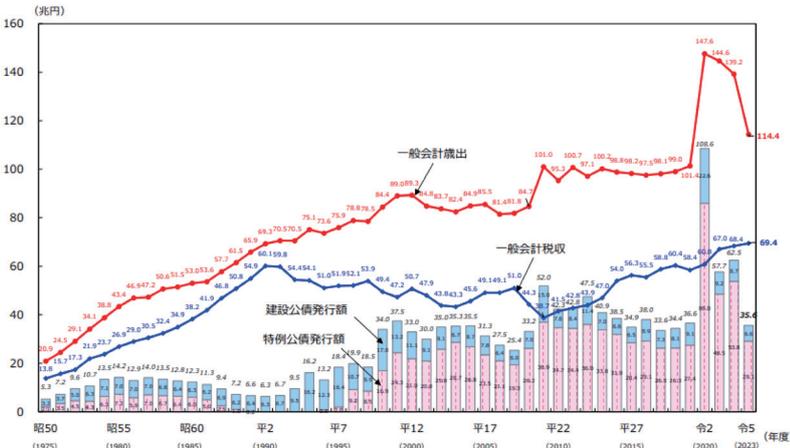
今回、明治大学連合駿台会の会場で会員の皆さんにお尋ねすると、おおざっぱに申し上げて、約五割が自由主義、約四割が保守主義、社民主義は少数派でした。企業経営者の方が多いため、それも頷けるところです。ただし、国民全体で見れば、高齢化が進むなかで、生活の自立が困難であったり、支え合う家族がいなかったりする方がますます増えていきます。将来の生活不安の軽減を目指し、国民が本当に高い税負担に納得するのであれば、「社民主義」も有力な選択肢かもしれません。

ただそのためには、時の経済が税負担に耐えられることが前提です。また、世界価値観調査二〇一九（電通総研）を見ると、「安心な暮らしに国が責任を持つべきか、個人が責任を持つべきか」という設問があり、日本は七十七カ国中、なぜかアラブ諸国等と並んで

5番目に「国が責任を持つべき」（七七％）との回答が多くなっています。興味深いのは、分断社会アメリカでは両者がほぼ半々、スウェーデンやフランスでは逆に七割前後が、「個人が責任を持つべき」と回答していることです。政府が大きい「社民主義」的な国ほど、「自助」がしっかりしていないと、国民が大挙して「国」にぶら下がるということにもなりかねないということでしょうか。

これに対し、自助や共助の役割を強化しながら「保守主義」を再構築する試みとして、「国・行政のあり方懇談会」（二〇一四年・内閣官房行革事務局）が提言した「自立した参加型社会」があります。主体的な「自助」と身の回りの社会課題の「自分ごと化」、政府が政府にしかできないことを担う「公助」。これをベースに、従来の「家族」の概念を超えた、シェアなどの「新しい共同体」での支え合いや、アメリカのアショカ財団の提唱する「チェンジメーカー」の創意工夫、賢い効率的な政府の実現、IT技術などを介した国民の社会課題解決への参加などを促す構想です。はたして、現在の「異形の社民主義」（税負担に関する国民的合意の曖昧なままに、ただただ政府の支援や無償化などの「公助」の拡大が進んでいる）とも言うべき状況から、「自立した参加型社会」に変えていくことは可能でしょうか。

図2 一般会計収税、歳出総額及び公債発行額の推移 (財務省資料)



(注1) 令和3年度までは決算、令和4年度は第2次補正後予算、令和5年度は政府による。
 (注2) 公債発行額は、平成2年度は沖縄復帰における平和的返還活動を支援する財源を調達するための臨時特別公債、平成6～8年度は消費税率3%から5%への引上げに先行して行った減税による増収収入の減少を補填するための臨時特別公債、平成23年度は東日本大震災からの復興のための復興特別公債、平成24年度及び25年度は基礎年金増額増額2分の1を実現する財源を調達するための臨時特別公債発行額に示している。
 (注3) 令和5年度の歳出については、令和6年度以降の防衛力整備計画経費の財源として活用する防衛力強化資金(債券) 繰入れ13.4兆円が含まれている。

④ 財政に健全化は不要か？
 国の歳入と歳入の関係のグラフ(図2)を見ると、財政赤字は拡大の一途を辿っています。追加政策に対する要望も限りがなく、まるで政府は何でもツケ回しできる打ち出の小槌であるかのようです。

確かに、国が国債発行で資金を集めているうちは、私たちが「潜在的な税負担」を意識

せずに済んでいます。しかし、マーケットで金融機関が国債を購入する原資は、私たちが銀行や保険会社に預けた金融資産(預金や保険料)です。私たちは、知らず知らずのうちに、税負担の代わりに自らの預金等を国の赤字の穴埋めに使わせているのです。

いざれ私たちは老後の生活資金のために貯蓄を取り崩す必要がありますが、もし私たちが子や孫がそれ以上に貯蓄に励み、国債購入を増やしていくのであれば、国の債務が増えます。借金を返済せずに(国債の永続的な借り換え)やっつけていけるのかもしれませんが、人口構成が逆ピラミッドとなっていくなかで、そのようなことは可能でしょうか。また、国債を買うために働き続けるような社会が本当に幸福な社会であるとは、私には思えません。

国債を返済する能力は、ひとえに将来世代の税負担能力(経済力)にかかっています。しかも厄介なのは、「潜在的な税負担」を「誰にいくらずつチャージするか」といった負担の配分の議論がないままに、簡単に国が借金を積み重ねてきていることです。昨年、防衛「増税」が提案された際には、人々の歳出への目が厳しくなり、法人が負担するのか、国民全体で負担するのかなど、「誰が払うのか」で揉めました。皆でさんざん飲み食いした後、驚くような請求書が来てから誰が払

うのかで揉めるような局面がいずれ来るのではと懸念します。

誰しも永遠に借金財政を続けられるとは考えていないと思います。まして国が紙幣を刷って歳入に充てたり、借金を返済したりするなどということが持続できるわけはありません。放漫財政でインフレが激しくなったら増税して需要を減らせばよいなどという意見は、国民感情や政治の現実を無視しています。既にわが国のGDPに占める債務残高の割合は、第二次大戦時の水準を超えました。確かに、いつ財政が危機に陥るのかは一概には言えません。しかし、茹でガエルのように、茹で上がるまで思考停止を続けるのか、その前に構造改革などともに財政の健全化も着実に進めていくべきなのか、決断が必要です。

北欧のような社会保障を希望しながら、消費税は一〇%のまままで済むとしたら、それは不自然なことです。まして日本は、高齢化における世界のトップランナーです。どのような税体系にすれば「フェア」な税負担が担保できるのか、そもそも国民全員で互いを支え合う「社会連帯」の気持ちは現代の日本人にどこまであるのか、議論を始める必要があります。

⑤ 日本の安全保障と防衛費

世論調査を見ると、防衛費のための増税に

反対の声が多いようです。これは、そもそも防衛費増について反対なのでしょう。あるいは、財源は借金でよいということなのでしょうか。日本をめぐる地政学的状況は、大変難しいところにあります。有事の対応についても、日本人の間にコンセンサスがあるわけではないように見受けられます。抑止力の確保は大変重要なテーマですが、それをどのように具体化するのか。国民の多くが国際環境の現状を適切に認識し、安全保障の重要性を理解することが議論の前提となります。

一方、防衛費の財源を「借金」任せにしていく限り、他人ごと感は否めません。今年一月八日のJNNの調査では、七割超の方々が、「他の予算の削減」で賄うべきとの意見のようです。一方、「他の予算」の筆頭は社会保障費です。年金や医療を削減して、防衛費を増やすのでしょうか。そもそも予算の六割しか税収がなく、プライマリーバランスも赤字の現状では、いくら歳出を削減しても借金を減らすことに止まり、新たな財源を生み出すことにはつながりません。冗費の削減は不断に行うべきですが、それで財源を生み出せるのは財政健全化が相当進んだあとのことです。

不思議なのは、防衛費増の四兆円は一時的な費用ではなく、インフラ事業のように将来の税収増につながるものでもありません。恒久的に支出し続けるものについて、負担を先

送りする理屈は何処にあるのでしょうか。なぜ、現世代は「いま必要な支出」について、そこまで負担を嫌がり、逃れようとするのでしょうか。現世代は払う気はないが、「将来世代なら払うだろう」と考えているのでしょうか。財政を悪化させることは、「抑止力」の裏打ちとなるべき日本の「国力」（継戦能力）にもダメージを与えかねないことも忘れてはなりません。

おわりに 私たちの選択

以上、私たちの目前にある様々な課題と選択肢について、申し上げました。

私たち現世代は、子や孫の将来世代に対して、今どのような言葉をかけてあげることができるでしょうか。私たちは、現世代の都合ばかりを優先してはいないでしょうか。学生さんたちをはじめ未来の世代が希望をもって社会に参画できるようにするには何が必要なのでしょう。私たちの目指す社会の共通認識のために、いくつか提案したいことがあります。

それは、
・ 自助が基本。その上で共助、最後に公助があること。

・ 共助も公助も他人任せでは成り立たず、私たちの「行動」や「参加」が求められるものであること。

・ 「根拠のない楽観論」に支配されて公助（政府）は拡大を続けているが、公助にはコスト＝税がかかること。そして、税はどこの誰かではなく、私（たち）が負担するものであること。

今こそ、将来世代のために、そして持続的な社会をつくるために、厳しくとも真剣に、私たちが向き合いつて選択しなくてはいけないことがあると考えます。

（講演会のあと、三枝様の閉会のお言葉をはじめ多くの会員の皆様からご感想をお聞かせいただきました。深く感謝申し上げます。）

以上

【講師略歴】

藤城 眞（ふじしろ・まこと）

一九八四年東京大学教養学部卒（国際関係論、大蔵省入省）

仏国立行政学院（ENA）留学、米沢税務署長、アフリカ開発銀行理事、国際金融情報センター・ブラッセル事務所長、総務省行政管理局管理官（定員・独法総括）、主計局主計官（内閣・司法警察・財務担当）、同（文部科学担当）、主税局税制第三課長、内閣官房行革事務局次長、理財局審議官、関税局審議官、東京税関長、東京国税局長を経て、二〇一九年退官。
現在、SOMPOホールディングス顧問、津田塾大学非常勤講師等。

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方をご紹介します。(敬称略・到着順)



百木田 康二
昭和三十二年・商学部卒
東武トップツアーズ(株)
代表取締役社長執行役員
神奈川県川崎市在住



小池 康浩
平成元年・法学部卒
サンキョーシヤッター(株)
代表取締役社長
宮城県仙台市在住



関口 勝裕
昭和六十三年・経営学部卒
三ツ矢物産(株)
代表取締役社長
千葉県千葉市在住



長瀬 琢磨
平成四年・法学部卒
丸紅(株)・原子燃料部長
東京都世田谷区在住



久保田 達之助
昭和六十三年・政経学部卒
ピップ(株)・取締役商品開発事
業本部長兼ブランド戦略部長
東京都豊島区在住



飛弾 健一
昭和六十年・政経学部卒
SMBC日興証券(株)
代表取締役副社長
東京都中野区在住



進藤 健一
昭和六十年・政経学部卒
三洋貿易(株)・取締役
千葉県野田市在住



大竹 卓也
平成二年・商学部卒
日本積層造形(株)
代表取締役社長
宮城県仙台市在住



奥住 賢二
昭和五十七年・政経学部卒
(株)明大サポート
代表取締役社長
東京都東久留米市在住



山井 太
昭和五十七年・商学部卒
(株)スノーピーク
代表取締役会長兼社長執行役員副社長
新潟県三条市在住

◆明大ニュース

●二〇二三年度「明治大学入学式」を挙行
眉秀でたる九千余人が明大生に仲間入り

二〇二三年度の明治大学入学式が四月七日、日本武道館(千代田区)で挙行された。新入生九千七百七十六人(学部生八千六十八人、大学院生千八百八人)が明治大学での新生活をスタートさせた。

式典は学部・大学院別に二部制で行われ、いずれも大六野耕作学長の告辞、柳谷孝理事長の祝辞、新入生代表による宣誓と進行した。告辞で大六野学長は、明治大学の建学の精神「権利自由」「独立自治」を紹介するとともに、「人間が人間として生きるに値する平和な社会・世界」の創出を目指す研究・教育の拠点である明治大学で、次の時代をデザイン・実現する知恵とスキルを身に付けてください」と力強く激励した。続く祝辞で柳谷理事長は、「明治大学には、全国そして全世界から、年齢も国籍も異なる多様な学生が集まっています。ほんの少し勇気を出して、ぜひ多くの人たちと交流を深め切磋琢磨をして

ください」と新入生に語りかけた。

新入生代表による宣誓は、午前の部に笠原雅仁さん（総合数理学部）、午後の部に横山奏さん（文学部）が登壇。笠原さんは、「多くの人々の幸せや世界の発展に寄与し、活躍できる人材となるべく、貪欲に学び、仲間と助け合い、『個』を確固たるものにしていきます」、横山さんは、「周りとのコミュニケーションを大切にし、社会の一員としての自覚を養い、自分と同じ世界にいる他者の存在を決して軽んじることなく共生していけるよう成長していきます」と、大学生活に向けた意気込みを誓った。その後、校歌斉唱が行われ入学式は閉式した。

続いて、新入生歓迎セレモニーが行われ、交響楽団、グリーククラブ、混声合唱団による新入生歓迎演奏と、校友（卒業生）代表によるメッセージ映像が放映された。登場したのは（株）ヒップランドミュージックコーポレーション代表取締役社長・（一社）日本音楽制作者連盟理事長の野村達矢さん、テレビ朝日アナウンサーの斎藤ちはるさん、FC東京の長友佑都さんの三人。心温まるメッセージに新入生やその家族から大きな拍手が送られる中、セレモニーは終了となった。

●OB社長

▽日清紡ブレーキ（株）服部恭輝氏（一九八九

年工学部卒・五十七歳

▽（株）フィスコ中村孝也氏（一九九八年政経学部卒・四十八歳）

▽（株）クルーパー河野映彦氏（二〇〇五年法学部卒・四十一歳）

▽JFEコンテナ（株）関谷慶宣氏（一九八七年経営学部卒・五十八歳）

▽新電元工業（株）田中信吉氏（一九八五年商学部卒・六十一歳）

▽クリエイトメディア（株）谷口英彦氏（一九八五年法学部卒・六十二歳）

▽飯野海運（株）大谷祐介氏（一九九一年法学部卒・五十五歳）

▽（株）長谷工不動産松本健氏（一九八八年法学部卒・五十七歳）

▽（株）UI銀行安田信幸氏（一九八八年商学部卒・五十八歳）

▽（株）ナルミヤ・インターナショナル（株）國京紘宇氏（二〇一四年グローバル・ビジネス研究科修了・五十五歳、五月二十三日就任）

▽アトムクス（株）宮里勝之氏（一九八五年工学部卒・六十歳、六月二十九日就任）

●「ポストコロナの高等教育」

明治・法政・関西トップ対談

明治大学・法政大学・関西大学の三大学連携事業シンポジウム「ポストコロナの高等教育を見直す一助へ」が三月四日に開催された。

関西大学千里山キャンパス（大阪府吹田市）で対面とオンラインを併用したハイブリッド方式で行われた。

シンポジウムは、三大学の総長・学長による講演から開始。法政大学の廣瀬克哉総長による「ポストコロナに向けての『実践知教育』の展開」、明治大学の六野耕作学長による「自ら未来をデザインし、地図を描く力を涵養する明治大学の取り組み」、関西大学の前田裕学長による「ポストコロナの『学の実化』と『総合知』と題した講演が行われ、ポストコロナの高等教育の行く末について、それぞれの大学の特色を踏まえながら目指すべき姿と現状の課題などが示された。

続く第二部は、「ポストコロナの高等教育」三大学連携の可能性」と題した三氏によるディスカッション。廣瀬総長は、「社会からは三大学は似た部分の多い大学と見られているが、学生が実際に交流してみると学風の違いを実感する。刺激を受けながら、お互いに学びを豊かにできるのでは」と述べた。それを受けた六野学長は、「例えば国際化につながるプログラムを一から作り上げるのはとても労力がかかるが、三大学が連携し、それぞれが持つリソースを共有できれば可能性が広がる。大学の枠を超えた取り組みを期待したい」と答えた。さらに、前田学長は、「首都圏と大阪で文化の違いもあるが、それをお

互いに知る機会を作っていく良いプラットフォームができてきている。今後も協力していきたい」と締めくくった。

三大学はいずれも一八八〇年代に創立され、法学教育をルーツとしている。二〇一七年の大学間連携協定の締結以降、さまざまな連携・交流を深め、三大学に影響を与えたフランス人法学者・ボアソナード博士にまつわる展示企画に始まり、SDGs推進活動、学生交流、図書館の相互利用、専任職員合同研修など、連携の幅は年々広がりを見せている。

●『虎に翼』モデルは三淵嘉子さん

制作スタッフが理事長・学長を訪問

日本放送協会（NHK）から二〇二四年度前期連続テレビ小説『虎に翼』の制作発表が二月二十二日に行われた。女優の伊藤沙莉さん演じる主人公・猪爪寅子のモデルは明治大学OGで日本初の女性家庭裁判所長である三淵嘉子さん（一九一四〜一九八四）。これを受けて、三月三日にNHKドラマ制作スタッフで制作統括の尾崎裕和さんとプロデューサーの石澤かおるさんが柳谷孝理事長、大六野耕作学長を訪問した。

尾崎さんは「三淵さんの法曹としての歩みは画期的。敬意を持ってドラマを作りたい。そして、明治大学の皆さんと一緒に盛り上げたい」と意気込みを語った。柳谷理事長か

らは「日本の女性法曹の歴史は明治大学の歴史そのもの。大学を挙げて協力したい」、大六野学長からは「女子部が一九二九年に開校され、社会で活躍する女性を輩出してきたことは我々の誇り。このことに光を当ててくれたことは非常にうれしい。今から放送開始が楽しみ」と期待が寄せられた。

三淵さんは専門部女子部卒業後に法学部に進学し、一九三八年に同学部を卒業、同年高等文官司法科試験に合格、日本初の女性弁護士となり、戦後には女性初の判事となった。ドラマ制作では、村上二博法学部教授（大学史資料センター所長）が法律考証に当たり、大学史資料センターが資料協力を担当する。

●第四回「大岡信賞」に野村喜和夫氏

明治大学と朝日新聞社が共催する「大岡信賞」の第四回授賞式が三月二日、朝日新聞東京本社で開催され、受賞者の野村喜和夫氏に賞牌と賞状が贈られた。

同賞は多様な芸術領域に大きな足跡を残し、戦後日本を代表する詩人の大岡信氏（元法学部教授）をたたえて二〇一九年度に創設された。今回の授賞は、野村氏の詩集「美しい人生」における光と音の魅力が際立つ円熟した成果、および長年にわたり、現代詩をけん引してきた創作活動が評価されたため。

ビデオメッセージで祝辞を寄せた大六野耕作学長は、「野村さんは、詩という形で日常生活のさまざまなものに内在する素晴らしさ、豊かさ、そして生の尊さ、美しさをうたい、問いかけてくれています」と語った。

受賞者スピーチで野村氏は、大岡氏から「今の現代詩の世界で、野村ほどの詩バカはいない」と、ほめ言葉として「詩バカ」と呼ばれたというエピソードを紹介し、「生ある限り『詩バカ』を貫いて、二十一世紀の日本語の詩に多少とも寄与していきたい」と締めくくった。

●藤青雲さんが十両昇進を報告

明治大学体育会相撲部出身の藤青雲（ふじせいうん、本名…東龍輝（ひがしたつき）、二〇二〇年政経学部卒）さんが四月十一日、駿河台キャンパスを訪れ、大六野耕作学長、柳谷孝理事長に新十両への昇進を報告した。

報告には藤島親方（元大関・武双山）、本校友の山分親方（元武雄山、一九九七年経営学部卒）と、相撲部の外池力部長（政治経済学部教授）、守重佳昭監督（二〇〇四年農学部卒）ら関係者が同席した。

藤青雲さんが大学を訪れるのは二〇二一年六月の序ノ口優勝以来二度目。大六野学長から「話し方が落ち着いて、体格も大きくなりましたね」と声をかけられた藤青雲さんは、

「以前報告に伺った際から二十kg増量しました」と笑顔で答えた。藤島親方は、藤青雲さんの四股名の由来が「青雲之志」という四字熟語であることなどを紹介するとともに、「大学時代に積み上げた基礎があつてやってこられたと思う。ここからがスタートライン」と述べ、さらなる指導への意気込みを語った。

藤青雲さんは卒業後、実業団を経て藤島部屋へ入門。二〇二一年春場所で初土俵を踏み、東幕下二枚目で臨んだ二〇二三年春場所を四勝三敗で勝ち越し、三月二十九日の番付編成会議で関取昇進が決まった。本学出身者としては同席した山分親方以来、二十三年ぶりの新十両となる。

●各キャンパスの学生交流スペースが

リニューアル

(株)スノーピーク寄贈のキャンパ用品や

ペーカリーも

二〇二二年度から二〇二三年度にかけて、駿河台・和泉・生田・中野の各キャンパスの学生交流スペースがリニューアルされた。これは、コロナ禍を経て、学生の居場所のさらなる拡充を目的として、各キャンパスの環境や利用状況に応じて行われたもの。

駿河台キャンパスは、リバティタワー一階ラウンジマロニエと各階の休憩スペース、アカデミーコモン一階ロビーの休憩・自習ス

ペースで什器の入れ替えが行われた。特にラウンジマロニエでは、電源コンセントのついた個人用カウンターテーブルとグループ利用席を、エリアを区切りながら導入し、座席数が増えたと述べた。

生田キャンパスでは、食堂館一階や学生会館で座席、照明の追加や壁紙の貼り換えなどとともに、(株)大サポートが営業するペーカリーが導入された。さらに、中央校舎一階と六階には、(株)スノーピークから寄贈されたキャンプ用のソファセットやラウンジシェル(簡易テント)などが配置され、自然豊かな生田キャンパスを象徴するような学生スペースに生まれ変わった。また、国際交流ラウンジが食堂館一階へ、学生相談室が中央校舎二階の診療所隣へそれぞれ移転し、学生が利用しやすい環境が整えられた。

和泉キャンパスでは、学生食堂のメニューの一新やペーカリー開店、中野キャンパスでも個室ブースの設置などの改修も行われた。

これらのリニューアルの多くは、二〇二二年度末に行われたリバティタワー二階の改修に続き、専任職員による部署横断型ワーキンググループで企画されたもの。このリニューアルにより二年間で四キャンパスに合計五百席以上の座席が増えた。一連の企画のねらいについて、ワーキンググループに参加した職員は、「学生同士の交流が自然と生まれるよ

うな空間を目指した」と述べる。

和泉ラーニングスクエアなど新しい校舎が増えている一方で、既存建物の老朽化対策や、オンライン授業などの新たな学習環境への対応も進められている。

●ボードセーリング部

インカレ五連覇を達成

体育会ボードセーリング部は、二月二十四日～二十六日に和歌山セーリングセンターで開催された二〇二二年度全日本学生ボードセーリング選手権大学対抗戦(インカレ)に出場し優勝、創部初となる五連覇を達成した。全九レースが行われた今大会、各レースに出場する三人の選手の合計ポイントで競われる団体戦で、明治大学は初日に出遅れるも二日目に巻き返して成功。最終日も首位を独走し、二位の慶應義塾大に13ポイント差をつけ優勝した。

この優勝を受け、同部は三月二十五日に大六野耕作学長らを訪問し、世界選手権での入賞なども含む二〇二二年度の戦績を報告した。

この日訪れたのは川野明正部長(法学部教授)、角張裕司監督、田中翔(政経4)、長井幹太(政経4)、小林将(文4)、川村飛翔(理工4)、高橋薫平(営4)、堀越あす香(総教4)、内藤紳之介(法3)の七選手。動画を用いた競技の説明なども行われ、前主将

の田中選手が「インカレという大きな大会で良い結果を出すことができた」と報告すると、大六野学長からねぎらいの言葉がかけられた。

●八幡山第三合宿所が竣工

競走部、サッカー部の二部が利用

体育会競走部とサッカー部が利用する明治大学八幡山第三合宿所が完成し、三月二十二日に現地で竣工式が執り行われた。式には、柳谷孝理事長、大六野耕作学長をはじめ、法人役員、大学役職者、両部関係者らが列席。八幡山八幡社の神職による神事に続いて、柳谷理事長と大六野学長があいさつに立ち、設計・監理、施工を担当した(株)シミズ・ビルライフケアに謝意を表すとともに、今後の両部のさらなる活躍への期待を示した。

両部総勢九十二人が居住する新合宿所は、玄関、食堂、トレーニングルーム、浴室などを各部に独立して設け、単独寮のような設えとなっている。居室は二人部屋だが、ロフトベッドの下に机を配置することにより、個の空間をつくり出した。さらに各所に自然採光を取り入れ、明るい居住空間を実現している。担当した施設課職員は設計のコンセプトについて、「見学に訪れた高校生がこの部に入りたいと思えるような、また、ここで過ごした学生が卒業してからも誇りに思えるような合宿所となることを期待している」とコメント。

経済、法曹、文化など各界でご活躍の明治大学OB諸氏よ！
来たれ！「連合駿台会へ！」



「連合駿台会」は、1953年に設立された「茗水クラブ」と、1964年に設立された「明友クラブ」が2002年に統合して設立された歴史と伝統あるOB組織です。

去る1月27日、感染対策を十分に行いつつ連合駿台会主催による「シンフォニー・サンセットクルーズ」を開催いたしました。クルーズ船ではシンフォニーの総料理長である小濱雅説氏（1981年法学部卒）による素晴らしいフルコースと、世界的な津軽三味線奏者である小山流三代目家元 小山豊氏の生演奏によるエン

ターテインメントなど盛りだくさんの内容で、楽しい時間を過ごすことができました。特に小濱総料理長考案の明治大学の要素がたくさん散りばめられたメニューに会場はとても盛り上がり、出席者一同おいしい料理に舌鼓を打ちました。



～ 各界で活躍されておられる明治大学校友のご入会を歓迎いたします ～

資料のご請求はこちらまで 連合駿台会事務局

TEL : 03-3296-4747 FAX : 03-3296-4748 HP : <https://www.rengosundaikai.jp>
Email : rengousundaikai@silk.ocn.ne.jp

★明治大学広報(3月1日号)に掲載された大学への支援広告。

経済、法曹、文化など各界でご活躍の明治大学OB諸氏よ！
来たれ！「連合駿台会へ！」



「連合駿台会」は、1953年に設立された「茗水クラブ」と、1964年に設立された「明友クラブ」が2002年に統合して設立された歴史と伝統あるOB組織です。

新入生の皆さま、入学おめでとうございます！

コロナ禍も落ち着きを見せ、今年も4月7日に日本武道館にて入学式が執り行われました。式典にはフレッシュな9176人の学生が集いました。いわゆる「Z世代」といわれる新入生ですが、幼少期からインターネットに触れる機会が多かったデジタルネイティブです。これ

からの時代で大きな課題となる多様性や、サステナブルな消費行動を意識することの大切さへの理解が深い彼らに、私たちの未来を託したいという期待でいっぱいです。ぜひ、大いに学び、交流し、有意義な学生生活を楽しんでください。



～ 各界で活躍されておられる明治大学校友のご入会を歓迎いたします ～

資料のご請求はこちらまで 連合駿台会事務局

TEL : 03-3296-4747 FAX : 03-3296-4748 HP : <https://www.rengosundaikai.jp>
Email : rengousundaikai@silk.ocn.ne.jp

★明治大学広報(5月1日号)に掲載された大学への支援広告。今後も2ヵ月に1回掲載していく予定です。

◆駿台トピックス

●第二十一回連合駿台会ゴルフ会を開催

連合駿台会の春期ゴルフコンペが、四月二十五日、土屋恵一郎前学長を含む二十名の参加のもと、小金井カントリー倶楽部で開催されました。当日は、天気予報がいい方にハズレて、絶好のゴルフ日和となりました。

ダブルペ

リア方式による成績結果は、優勝は40・40の見事なベスグロで回った山口大介会員（平成十二年・政



経卒)、準優勝は昨年入会され、初参加の勢藤大輔会員（平成十五年・商卒）、三位は神林光会員（平成十五年・法卒）と、若いメンバーが実力を発揮しました。

優勝者には陶芸家竹内裕会員作の優勝カップ、準優勝と三位には寄贈された陶器のお皿とお茶碗が副賞として贈呈されました。

◆三月例会出席者

相澤淳一、青木幹則、青柳勝栄、浅井宏、

安達明正、阿部倫明、有賀隆治、石川均、ご同伴、伊東正博、ご同伴、伊原敏雄、上西紘治、宇川一夫、潮田伊佐夫、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、大屋政則、奥村勝広、尾暮敏範、鬼塚和也、加賀美猛、金井健、狩野省市、栢森靖、百木田康二、河村博、神田達治、神林光、木下唯志、清野明男、草木頼幸、國井泰成、久保聡、黒崎昭男、小池康浩、小井戸亮文、小島清治、児玉圭司、ご同伴、小濱雅説、小松健、根田哲雄、根田吉雄、齋藤柳光、三枝富博、坂田英夫、坂本孝行、坂本道昭、佐藤健、佐野公哉、柴田清之、杉浦伸二、鈴木啓太、鈴木隆志、ご同伴、関根均、瀬戸正道、勢藤大輔、高澤徹、高橋一成、武内裕、田代恭一（代理）、田邊弥、ご同伴、田村駿、樽見俊之、辻井知明、当山明彦、徳丸平太郎、富田浩志、富水流孝二、中川敏洋、中野祥宏、ご同伴、二井康夫、西澤豊、野口一哉、萩原裕次、長谷川進一、埜英幸、馬場範夫、濱田憲孝、林威樹、平田静子、深代尚夫、福田和彦、ご同伴、藤代耕一、古本英樹、眞壁八郎、水澤元博、宮下隆、村岡健、村山友彦、室井恵明、ご同伴、柳谷孝、山口大介、山口政廣、山田晃久、山田憲典、山田朝彦、山根俊明、山村明好、弓野理恵、吉田光一郎、同令夫人、吉田信行、ご同伴、吉田均、渡邊建三

【編集後記】

「初夏の季節を迎え、明治大学連合駿台会の会報編集を担当した〇〇です。この季節らしく、OBの皆様からは新たな活躍の報告や思い出を語っていただき、読んでいるこちらも清々しい気持ちでいっぱいです。ますます暑くなっていく季節に、皆様方のご活躍を心より応援しています。」

今、話題となっているチャット―GTPを始めとする自動応答チャット生成AIのアプリで、「明治大学連合駿台会の会報の編集後記を、初夏の季節感も入れて一〇〇字で書いて」という質問をして返ってきた答えです。

個人情報・著作権の問題、文章力・思考力への影響などの懸念が議論され、ルールがこれから定まっていくものと思いますが、今回試しに使ってみて、一般的な内容であれば、人が書くような文章が一瞬で返ってきて、企業においては間違いなく業務の効率化が図れるものと感じました。

若い社員が、先輩や上司に「赤ペン先生」のごとく直してもらいながらビジネス文書の書き方を覚えていくといったことは、これからはなくなっていくのかもしれませんが。

AIやロボットの進歩で、人間が担当する仕事のあり方や、人材育成・教育のあり方も大きく変わっていくのだと思います。

新型コロナウイルス感染症の扱いが5類に変わり、コロナ前の日常が戻ってきました。これから暑い季節がやってきますが、皆様が健康で有意義な日々を過ごされますことをお祈りいたします。

(弓野理恵)